

チアリーディング日本選手権大会上位入賞チームの演技構成について (2004 年度～2006 年度) The Routines in Japan Cup Cheerleading Competition finals (2004~2006)

1 K03A019-6 磯崎 萌絵

指導教員 主査 土屋 純 先生 副査 太田 章 先生

1. 研究目的

本研究の目的は、2004～2006 年における JAPAN CUP チアリーディング日本選手権大会上位入賞チームの演技構成を演技要素別に統計を取り、演技構成を考える上での基礎資料として有効なものを作成することである。チアリーディングの競技会は、社団法人日本チアリーディング協会が主催し、年に数回行なわれている。2006 年度は全国大会が 4 回、地方大会が 9 回、子供大会が 1 回開催された。多くの大学チームはそこから、4 つの大会に参加し、日本一を争う。筆者が所属する早稲田大学チアリーダーズ FALCONS (以下 FALCONS) も毎年 4 つの大会に出場するのだが、大会成績はあまり良いとはいえない。その原因の一つが近年急激に向上したチアリーディングのスタンツレベルの上位チームとの差で、二つ目の原因としては、演技構成の上位チームとの差が考えられる。従って本研究の演技要素統計資料の利用目的は、FALCONS の演技構成能力のレベルアップをはかることにある。技術以前に問われる構成能力を底上げすることで、FALCONS の上位入賞への可能性を拡大したい。なお、演技要素別の統計研究は現在まで行われていないため、本研究がその初の試みとなる。

2. 研究方法

研究方法として、対象とした大会の決勝戦 3 年分の演技をビデオ分析する。

対象大会: 2004 年から 2006 年に行われた JAPAN CUP チアリーディング日本選手権大会 (部門別日本一決定戦) の決勝戦。

対象チーム: 上記試合の決勝戦進出チームを対象とした。決勝進出チームとは、地区予選大会で「自由演技」170 点以上を獲得したチームで、さらに準決勝も通過したチームである。なお、今回の研究にあたり、競技規則が異なる男女混成チームは研究対象から外し、チーム全員が女性であるチームのみの統計を対象とした。よって 2004 年度 10 チーム、2005 年度・2006 年度 11 チームの統計に加え、2004 年度～2006 年度 FALCONS の計 35 チーム分を対象とする。

研究資料: 研究資料のビデオは、NHK 衛星第 2 テレビ (BS 2) で生中継される、JAPAN CUP チアリーディング日本

選手権大会 (部門別日本一決定戦) の決勝戦放送を録画したものを使用した。今回は研究対象の 2004～2006 年度分を研究資料とする。

分析方法

- ① 演技の分割：演技を大きく二つ (音楽未使用部分と未使用部分) に分けて、各タイムをとる。
- ② 演技要素の場面数を数える：演技要素 (チアリーディング技術) の場面数を数える。
- ③ 演技内容を分析する：②で数えた演技要素の場面数から、演技要素の内容と回数を分析するとともに、その技のクライミング姿勢やディスマウント姿勢においても統計をとる。
- ④ 集計方法：集めたデータを元に統計資料を作成した。次に Microsoft Excel を使用して各場面数・回数・内容の平均値を算出した。集計結果から上位入賞チームと FALCONS の統計結果を、比較研究した。

3. 結果および結論

1. パートナースタンツ

バランスはアラベスク以上のものを行い、ヒール・アラベスクを行う場合はディスマウント局面でツイストを使用し、もしそれができないならば、スコープオンからポップアップで下ろすと良い。スイッチやクライミング姿勢で難しいものを行う場合以外は、4 台行くと良い。

2. ピラミッド

1 場面増やし、台数も 2 台増やし、ピラミッドの種類として 1-1-1・2-2-1 を演技構成に入れると良い。さらにそれに伴い、クライミング姿勢にはトスアップを用い、可能ならばフルターン・ハーフターンなどひねりを加えると良い。ディスマウント姿勢に対しても、ひねり、または宙返りを加えて行くと演出に差がでる。

3. タンブリング

ロンダート・バック転以上のものを演技構成に組み込むと良い。ロンダートはチームの半数以上が同時に行わなければならないため、他の演技の場面数を不測させる場合は行わないほうが良い。